

「とうとうたらり」と雅楽の唱歌

高 桑 い づ み

「とうとうたらりたらりら」、翁は不可思議な詞章で ongoing に始まる。この呪文めいた詞章の出自をめぐって、チベットの語説、唱歌説、呪文説等、さまざまな解釈があるの言うまでもない。近年では天野文雄氏が陀羅尼と響きが近い旨指摘されたが、大勢は唱歌説で落ちついてゐる。翁の詞章には「鳴るは滝の水(今様)」や「あげまきやとんどや(催馬楽)」等、平安後期に流行した歌謡が取り入れられているので、「とうとうたらり」も何らかの歌謡だった可能性が高い。今までは漠然と「とうとう」は太鼓で「たらり」は笛、あるいは「とうとうたらり」全体が笛の唱歌という説が通行していたが、それとは別の視点から、再び「とうとうたらり」唱歌説を唱えてみたい。

今日一般に唱歌といえば、筆策の「チーラーロール」や能管の「オヒャーラー」といった一節が思い浮かぶ。「チーラー」と唱えて楽曲や舞を覚えていくのだが、西洋音楽のドレミとは異なり、カナにさ

まざまな意味を託するのが特徴である。たとえばイ音は高音、オ音やウ音は低音というようにカナの母音と旋律の高低を一致させる傾向があるし、雅楽で言えばタ行は旋律の冒頭、ラ行は旋律の途中というように子音が旋律の構成や奏法を示す。またリズムの点では、旋律の一拍一音をカナ一字一字に当てるのが基本である。ところが、このようにシステムが整ったのは比較的後代のことらしい。

かつては歌詞を唱歌と呼ぶ例もあったが、平安時代には、歌詞でもなく楽器の旋律を唱えるものでもない第三の唱歌が存在していた。その具体例が『源氏物語』の「手習いの巻」、小野の大尼君が和琴を弾く場面に見える。

「和琴」をとり寄せて、たゞいまの笛の音をも尋ねず、たゞおのが心をやりて、東の調べを、爪さわやかに調ぶ。皆、異物は声やめつるを、「これのみ、めでたる」と、思ひて、「たけふちりくたりたな」など、掻

き返し、はやりかに弾きたる言葉ども、わりなく、古めきたり。

和琴にあわせて「たけふちりくたりたな」と唱えたというのだ。石田百合子氏は、楽器を特定していないこと、『源氏』の注釈書『河海抄』に「唱歌事有例 笛ノソウカニテハナキ也。昔ハサウカノフトテ別ニ有ケルナリ。」とあることから、特定の楽器のためではなく、歌謡として歌う唱歌が別個に存在した可能性を指摘された。この唱歌、どこなく「とうとうたらり」に似ていないだろうか。『源氏物語』では「古めきたり」と書かれているが、この唱歌、実はその後も歌詞として歌い継がれている。たとえば催馬楽の「大宮」では「大宮の／西の小路に／漢女子産だり／さ漢女子産だり」という歌詞の最後に「たらりやりんたな」、同じく「田中」では歌詞の途中に「たたりらり」、「酒飲」でも譜本によっては歌詞の最後に「タンナタンナタリリララ」等と囃子詞風にこの唱歌を入れてゐる。この部分にも墨譜が付いているから、歌詞と同じように歌ったのだろう。

催馬楽では歌詞の一部だったが、雅楽一曲をこのような唱歌で通すこともあったらしい。「順次往生講式」という声明曲のなかの「極楽声歌」がそれである。と言つても通常知られているのは経文や

教化風の歌詞を当てはめるスタイルで、たとえば、「慶雲楽」という楽を「ミタホトケノ／チカヒタノモシ／ミナヒト／コノホトケニ／ツカヘヨヤ／アナカシコ」¹という歌詞で歌ったりしている。ところが、「知国秘鈔」と金沢文庫蔵の「楽邦歌詠」には歌詞の代わりに唱歌を記した珍しい譜が残っている。両譜ともすでに翻刻されているが、能楽界ではあまり知られていないと思うので、紹介しておく。

【知国秘鈔】は、鎌倉時代初期に琵琶の名手として活躍した藤原孝道がその男孝行に与えた楽の秘事口伝で、安貞三（一二二九）年に書写された卷子本である。その巻末に「万歳楽」「三台急」「賀殿」の唱歌が載っている。「万歳楽」の唱歌は次の通りである。

タリイ タラ、チャラ、ラリ、タ
ンナチイラ タンナア ラリ チイ
ヤ タリ、チラ、タラ タリヤチラ
タアリイ
チャラ リイラレ ナ引 タリ チ
ヤラタリイ タンナ タリ チャラ、
リラ、ラリイ タアリイチャラ、リイ
ラ、タンナ チャラ リラ、 タア
リイラリ、タアリヤ リラ、 チャ
ラン ナ引
半帖チイヤ タアラチイヤ タアリ

チラ、リラタンナラリ、
三曲ともカナだけなので、残念ながらも
のような旋律だったのか知るすべがない
が、現行のように楽音とカナを一对一で
対応させるとカナの方が圧倒的に足りな
くなる点に注目したい。

また金沢文庫には「長保楽」と「延喜
楽」の譜本が残っているが、そこには一
字一句に至るまで同じ唱歌が記されてい
る。唱歌の一部を載せておこう。

タリタムナ タラリタムナ リヤリ
ヤラムナ リヤリヤラムナ タリタ
ムナ

タラリタラリ タラリタリチリヤリ
「長保楽」と「延喜楽」は全く別の楽曲
である。ところが、唱歌の左横に付いた
墨譜までほとんど同じで、しかも「長保
楽」「延喜楽」のどちらの旋律とも一致し
ない。現在のような、旋律にびつたり対
応させる唱歌でなかったことは明白であ
る。

『後拾遺和歌集』所収の俳諧歌「笛の
音の／春おもしろく聞こゆるは／花ちり
たりと吹けばなりけり」や『五重十操記』
の記述から、平安時代には既に「ちり・
たり」という唱歌が存在していたと言わ
れている。しかしそれが、現在と同じよ
うに旋律一音ごとに対応させるものだっ
たという確証はない。【教訓抄】（一二三

三）には「輪台・青海波」の笛の唱歌が
載っているが、やはり現行とは異なり、
笛の指孔やリズムとは無関係にカナが付
いている。芝祐靖氏は「口伝の漏れるの
を恐れてわざわざ拍子はずし、適当な
仮名を羅列させたのではないか」と推測
されたが、今までの曲例から判断すると、
唱歌の唱え方そのものが現在とは異なっ
ていた、と考えた方がよさそうだ。雅楽
の歌い物、催馬楽ではカナ一字を長く引
き、そこにさまざまな旋律を盛り込んで
謡うが、それと、同じ歌い方だったのだ
ろう。

このように、特定の楽器と関わりを持
たず、しかも声を引いてゆるやかに歌う
唱歌が寺院に伝承されていた。翁猿楽の
成立には寺院の法会が深く関わっていた
わけだが、その中で歌う歌謡も例外では
あるまい。「とうとうたらり」はこの寺
院歌謡から派生したのではなからうか。
「たりたんな」と「とうとうたらり」で
は多少カナが異なるが、この程度なら
「鳴るは滝の水」や「あげまき」同様、
翁に挿入された後の訛化と考えられる。
またこの部分、謡は拍子不都合で部分的に
声を引いて謡う。ゆつたりと歌う「たり
たんな」の面影を残しているのではな
からうか。

（東京国立文化財研究所芸能部研究員）